

紅玉

泉鏡花

青空文庫

時——現代、初冬。

場所——府下郊外の原野。

人物——画工。侍女（烏の仮装したる）。貴夫

人。老紳士。少紳士。小児五人。——

別に、三羽の烏（侍女と同じ扮装）。

小児一　やあ、^{ステエシヨン}停車場の方の、遠くの方から、あんなものが遣^やつて来たぜ。

小児二　何だい^く。

小児三　あゝ、^{おおき}大なものを背負^{しよ}つて、^{よろよろ}蹣跚々々来るねえ。

小児四 影法師まで、ぶら／＼して居るよ。

小児五 重いんだらうか。

小児一 何だ、引越ひっこしかなあ。

小児二 構ふもんか、何だつて。

小児三 御覽よ、脊せなよりか高い、障子見たやうなものを背負しよつて
るから、たこ風が歩行あるいて来るやうだ。

小児四 糸をつけて揚げる真似や工して遣らう。

小児五 遣れ／＼、おもしろい。

風を持ったのは風を上げ、独楽こまを持ちたるは独楽を廻す。手
にものなき一いちにん人、一方に向ひ、風の糸を手繰たぐる真似して笑
ふ。

画工（わくばり） 梓張（きぬじ）のまゝ、絹地の画（え）を、やけに紐（ひも）からげにして、薄（う）

汚（すよご）

れたる背広の背に負（お）ひ、初冬（はつふゆ）、枯野の夕日影にて、あか

くと且（か）つ寂（さみ）しき顔。酔（よ）へる足どりにて登場）……落第々々、

おおらくだい

大落第（おおらくだい）。（ぶらつく体を杖（ステッキ）につつか突掛くる状（さま）、疲切（つかれき）つたる樵夫（きこり）

の如し。しばらくして、叫（こゑ）ぶ）畜生（ちくしよう）、状（ざま）を見やがれ。

声に驚き、且（か）つ活（い）ける玩具（おもちゃ）の、手許（てもと）に近づきたるを見て、

糸を手繰りたる小児（こども）、衝（つ）と開（ひら）いて素知（そし）らぬ顔す。

画工（そ）、其の事には心付（こころづ）かず、立停（たちど）まりて嬉戯（きぎ）する小児等（しょうにら）

をみまわす。

よく遊（あそ）んでるな、あゝ、羨（うらやま）しい。何（ど）うだ。皆（みんな）、面白（おもしろ）いか。

小児等（こどもら）、彼の様子を見て忍（しの）びわらい笑（わら）す。中に、糸を手繰りたる

いちにん
一人。

小児三 あゝ、面白かつたの。

画工 (管をまく口吻くちふり) 何、面白かつた。面白かつたは不可いかん

な。今の若さに。……小児こどもをつかまへて、今の若さも変だ。

(笑ふ) はゝゝは、面白かつたは心細い。過去すぎつた事のやうで

情なさけない。面白いと云へ。面白がれ、面白がれ。尚なほ其の上に面

白く成れ。むゝ、何どうだ。

小児三 だつて、兄にいさん怒おこるだらう。

画工 (解し得ず) 俺おこが怒る、何を……何を俺が怒るんだ。生命いのち

がけで、描かいて文部省の展覧会で、平へえつくばつて、可いいか、洋服ひざの膝を膨らまして膝行いざつてな、いゝ図ぢやないぜ、審査所の

お玄関で頓首再拜と仕つた奴を、紙鉄砲で、ポンと撥ね

られて、ぎやふんとまるつた。それでさへ怒り得ないで、悄

々と杖に縋つて背負つて帰る男ぢやないか。景氣よく馬肉

で呷つた酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい

処へ、げつそりと空腹と来て、蕎麦ともいかない。停車場

前で饅飩で飲んだ、臍腑が宛然蚯蚓のやうな、しツこしのな

い江戸児擬が、何うして腹なんぞ立て得るものかい。ふん、

だらしやない。

他の小児はきよろ／＼見て居る。

小児三 何だか知らないけれどね、今、向うから来る兄さんに、

糸目をつけて手繰つて居たんだぜ。

画工 何だ、糸を着けて……手繰つたか。いや、怒りやしない。

何の真似だい。

小児一 兄さんがね、然うやつてね、ぶら／＼来た処がね。

小児二 遠くから、まるで以て、風の形に見えたんだもの。

画工 はゝあ、風か。（背負つてる絵を見る）むゝ、其処で、

（仕形しつゝ）と遣つて面白がつて居たんだな。処で、俺が慥

う近く来たから、怒られやしないかと思つて、其の悪戯を止

めたんだ。だから、面白かつたと云ふのか。……かつたは寂し

い、つまらない。壮に面白がれ、もつと面白がれ。さあ、糸を

手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、風に成つて、上つて遣らう。

上つて、高い空から、上野の展覧会を見て遣る。京、大阪を見

よう。につぼんじゅう 日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの児来

て煽れ、あおそれ、お前は向うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。

(笑ふ) はゝゝ、面白い。

こどもら 小児等しばらくしゅんじゅん逡巡す。画工の機嫌よげなるを見るより、

一人は、画工の背をせなかいだ抱いて、風を煽る真似す。一人はかけだ駈出し

て距離を取る。其のいちにん一人。

小児三 やあ、おおだこ大風だい、一人ぢや重い。

小児四 うん、手伝つて遣ら。こまふところ(と独楽を懐にして、たちなら立並ぶ)

——風吹け、や、吹け。山の風吹いて来い。——(同音に囃す

。)

画工 (あふりたる児のこ手を離るゝと同時に、おおで大手を開いて) 恁

う成りや風絵だ、提灯屋だ。ちようちんや そりや、しやくるぞ、水汲むぞ、

べつかつこだ。

小児等の糸を引いて駈かけるがまゝに、ふらくと舞台を飛とびまわ廻

り、やがて、樹根きのねにどうと成りて、切なき呼吸いきつく。

暮ぼしよく色到る。

小児三 風は切ちやれ了つた。

小児一 暗く成つた。——丁ちようど可いい。

小児二 又、……あの事をしよう。

其の他 遣やらうよ、遣らうよ。——（一同、手はつながず、少し

づ、間あいだをおき、くるりと輪に成りて唄うたふ。）

青山、あおやま葉山、はやま羽黒の権現ごんげんさん

あとさき言はずに、中はくぼんだ、おかまの神さんかみ

唄ひつゝ、廻りつゝ、繰返す。

画工（茫然ぼうぜんとして默想したるが、吐息といきして立つて此これを視ながむ。）
おい、おい、其それは何の唄だ。

小児一 あゝ、何の唄だか知らないけれどね、慥こうやつて唄つて居ると、誰か一人踊おどり出だすんだよ。

画工 踊る？ 誰が踊る。

小児二 誰が踊るつて、此このね、環わの中へ入つて踞しゃがんでるものが踊るんだつて。

画工 誰も、入つては居おらんぢやないか。

小児三 でもね、気味が悪いんだもの。

画工 気味が悪いと？

小児四 あゝ、あの、其がね、踊らうと思つて踊るんぢやないんだよ。ひとりでにね、踊るの。踊るまいと思つても。だもの、気味が悪いんだ。

画工 遣^やつて見よう、俺を入れろ。

一同 やあ、兄さん、入るかい。

画工 俺が入る、待て、（画^えを取つて大^{たい}樹^{じゆ}の幹によせかく）さあ、可^いいか。

小児三 目を塞^{ふさ}いで居るんだぜ。

画工 可^{よし}、此^{この}の世^{よの}間^{なか}を、酔^よつて踊りや本^{ほん}望^{もう}だ。

青山、葉山、羽黒の権現さん

小児等唄ひながら画工の身の周囲を廻る。環の脈を打つて伸
 び且つ縮むに連れて、画工、殆んど、無意識なるが如く、片
 手又片足を異様に動かす。唄ふ声、愈々冴えて、次第に暗
 く成る。

時に、樹の蔭より、顔黒く、嘴黒く、烏の頭して真黒なるマ
 ント様の衣を裾まで被りたる異体のもの一個顕れ出で、小児
 と小児の間に交りて齊しく廻る。

地に踞りたる画工、此の時、中腰に身を起して、半身を左右
 に振つて踊る真似す。

続いて、初の黒きものと同じ姿したる三個、人の形の烏。樹
 蔭より顕れ、同じく小児等の間に交つて、画工の周囲を繞る。

小児等は絶えず唄ふ。いづれも其の怪き物の姿を見ざる趣なり。あとの三羽の鳥出でて輪に加はる頃より、画工全く立上り、我を忘れたる状して踊り出す。初手の鳥もともに、就中、後なる三羽の鳥は、足も地に着かざるまで跳梁す。

彼等の踊狂ふ時、小児等は唄を留む。

一同（手に手に石を二ツ取り、カチ／＼と打鳴らして）魔が来た、でん／＼。影がさいた、もんもん。（四五度口々に寂しく囃す）真個に来了。そりや来た。

小児のうちに一人、誰とも知らず慥く叫ぶとともに、ばら／＼と、左右に分れて逃げ入る。

木の葉落つ。
こは

木の葉落つる中に、一人の画工と四個の黒き姿と頻に踊る。
いちにん しきり

画工は靴を穿いたり。後の三羽の鳥皆爪尖まで黒し。初の
は つまざき はじめ
鳥ひとり、裾をこぼるゝ棲紅に、足白し。
すそ つまれない

画工（疲果てたる状、と仰様に倒る）水だ、水をくれい。
つかれは さま どう のげさま

いづれも踊り留む。後の鳥三羽、身を開いて一方に翼を交は
や ひら か
したる如く、腕を組合せつゝ立ちて視む。
くみあわ なが

初の鳥（うら若き女の声にて）寝たよ。まあ……だらしのない

事。人間、慙うは成りたくないものだわね。——其のうちに目
こ

が覚めたら行くだらう——別にお座敷の邪魔にも成るまいから。
ゆ

……どれ、（樹の蔭に一むら生茂りたる薄の中より、組立て
ひと おいしげ すすき くみた

に交叉こうさしたる三脚の竹を取出とりだして据すゑ、次に、其上そのうえに円まるき板を置き、卓テエブル子の如ごとくす。)

後の鳥、此の時、三羽みつとも無言にて近づき、手伝さまふ状にて、二脚のズツク製、おなじ組立ての床几しょうぎを卓テエブル子の差向さしむかひに置く。

はじめ
初の鳥、又、旅行用手提げの中より、葡萄酒の瓶びんを取出とりだだし卓テエブル子の上に置く。後の鳥等ら、青き酒、赤き酒の瓶、続いてコップを取出とりだして並べ揃そろふ。

やがて、初の鳥、一挺ちようの蠟燭ろうそくを取つて、此に火を点ず。
舞台あかる明くなる。

初の鳥 (思ひ着きたる体ていにて、一ツひとつの瓶の酒を玉盞ぎよくさんに酌つぎ、

燭しよくに翳かぎす。）おゝ、綺麗きれいだ。燭あかりが映うつつて、透徹すきとおつて、いつかの、あの時、夕日の色に輝きらいて、丁ちようど東の空に立つた虹にじの、其の虹の目のやうだと云つて、薄雲うすぐもに翳かぎして御覽ごらんなすつた、奥様の白い手の細い指には重さうな、指環たまの球に似てゐること。

三羽ばの鳥、打傾うちかたむいて聞きつゝあり。

あゝ、玉たまが溶けたと思ふ酒を飲んだら、どんな味がするだらうねえ。（鳥かしらの頭を頂きたる、咽喉のどの黒き布ぬのをあけて、少わかき女の面おもてを顕あらわし、酒を飲まんとして猶ためら予らふ）あれ、こゝは私には口くちだけれど、鳥にすると丁ちようど咽喉だ。可厭いやだよ。咽喉だと血が流れるやうでねえ。こんな事をして居るんだから、氣に成る。よさう。まあ、独ひとりごと言ことを云つて、誰かと話をして居るやうだよ：

…

（四辺あたりをみまわす）然そうく、思おもつた同士、人前ないしやうで内証ないしやうで心を

通かよはす時は、一ひとツに向むかつた卓子テエブルが、人知あれず、脚あしを上げたり

下げたりする、幽かすかな、しかし脈みやくを打うつて、血ちの通とほふ、其ふちよの符ふ

牒うで、黙もくつて居ゐて、暗号あいごうが出来いると、何時いつも奥様おくさまがおつしや

るもんだから。——卓子テエブルさん（卓たくをたゝく）殊ことにお前まへさんは

三ツ脚あしで、狐狗狸こつくりさん、其そののまゝだもの。活いきてるも同じおなじだと

思おもふから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うつかりして、

少々しやべ大事なことを饒舌しやべつたんだから、お前まへさん聞きいたばかりに

して置いておくれ。誰たれにも言いつては不可いけないよ。一寸ちよいと、注ついだ

酒どを何なんうしよう。ああ、いゝ事ことがある。（酔倒よいたおれたる画工がこうに

近づく。後の鳥一ツ、同じく近寄りて、画工の項を抱いて仰向
けにす。）

酔ぱらひさん、さあ、冷水。

画工（飲みながら、現にて）あゝ、日が出た、が、俺は暗夜だ。
（其まゝ寝返る。）

初の鳥 日が出たつて——赤い酒から、私の此の鳥を透かして、
まあ。——画に描いた太陽の夢を見たんだらう。何だか謎の
やうな事を言つてゐるわね。——さあ、お寢室こしらへをし
て置ませう。（もとに立戻りて、又薄の中より、此のたび
は一領の天幕を引出し、卓子を蔽うて建廻はす。三羽の鳥、
左右より此を手伝ふ。天幕の裡は、見ぶつ席より見えざるあつ

らへ。たのし）お楽しみだわね。

テント うしろ（天幕を背後にして正面に立つ。三羽

の鳥、其の両方にたたずゐむ。）

もう、すっかり日が暮れた。（時に、はじめてフト自分の他に、

鳥の姿ありて立てるに心付く。（ころづされどおのが目を怪む風情。あやし ふぜい

少しづつ、あちこち歩行く。ある歩行くに連れて、鳥の形動き絡ふまと

を見て、次第に疑惑を増し、手を挙げれば、鳥等も同じく挙

げ、袖を振動かせば、齊しく振動かし、足を爪立つれば爪立

ち、踞めば踞むを透し視めて、今はしも激しく恐怖し、慌しく

かけいだ駈出す。）

帽子を目深に、オーバーコートの鼠色なるを被、太き洋

杖テツキを持てる老紳士、憂鬱なる重き態度にて登場。

はじめ
初の烏ハタと行^{ゆき}當^{あた}る。驚いて身を^{ひら}開く。紳士其^その袖を^{とら}捉ふ。
初の烏、遁^{のが}れんとして威^{おど}す真似して、かあゝ、と烏の声を
なす。泣くが如き女の声なり。

紳士 こりや、地獄の門を背^{しよ}負つて、空を飛ぶ真似をするか。

(掴^{つか}み)ひしぐが如くにして突^{つき}離^{はな}す。初の烏、^{どう}と地に坐す。三

羽の烏は故^{わざ}とらしく吃^{きつきよう}驚^きの身振^{みぶり}をなす。一^は地を這ふ烏は、

鳴く声が違ふぢやらう。うむ、何^どうぢや。地を這ふ烏は何と鳴
くか。

初の烏 御免なさいまし、何^どうぞ、御免なさいまし。

紳士 はゝあ、御免なさいましと鳴くか。(繰返して)御免なさ
いましと鳴くぢやな。

初の鳥 はい。

紳士 うむ、（重く頷く）聞えた。とに角、汝の声は聞えた。――

――こりや、俺の声が分るか。

初の鳥 えゝ。

紳士 俺の声が分るかと云ふんぢや。こりや、面を上げろ。――

何うだ。

初の鳥 御前様、あれ……

紳士 （杖を以つて、其の裾を圧ふ）ばさく騒ぐな。槍で脇腹

を突かれる外に、樹の上へ得上る身体でもないに、羽ばたきを

するな、女郎、手を支いて、静として口をきけ。

初の鳥 真に申訳のございません、飛んだ失礼をいたしましたし

た。……先達^{せんだ}つて、奥様がお好みのお催^{やしき}しで、お邸^{やしき}に園遊会の
仮装がございました時、私^{わたくし}がいたしました、あの、此のこしら
へが、余りよく似合つたと、皆様^そが然うおつしやいましたもの
でございますから、つい、心得^{こころえ}違ひな事をはじめました。あ
の——後^{あと}で、御前様が御旅行を遊ばしましたお留守中は、お邸
にも御用^{すく}が少うございますものですから、自分の買^{かい}もの、用達
しだの、何のと申して、奥様にお暇^{ひま}を頂いては、こんな処^{ところ}へ出
て参りまして、偶^{たま}に通りますものを驚^{おど}かしますのが面白くて成
りませんので、つい、あの、癖^{くせ}になりました、今晚も……旦^{だんな}—
那^{さま}様に申訳のございません失礼をいたしました。何^どうぞ、御
免遊ばして下さいまし。

紳士 言ふ事は其だけか。

初の鳥 はい？（聞返す。ききかえ）

紳士 俺に云ふ事は、それだけか、女郎。めろう

初の鳥 あ、の、（口籠るくちごも）今夜は何ういたしました事でござい

ますか、私の形……あ、の、影法師が、此の、野中の宵闇に判はつつきり

然と見えますのでございます。其さへ気味が悪うござい
 のに、氣をつけて見ますと、二つも三つも、私と一わたくし いっしょ所に動き
 ますのでございますもの。

三方に分れてゐむ、三羽の鳥、また打うちうなず領りやうく。

もう可おそろし恐く成りまして、夢中で駈出かけだしましたものですから、

御前様ごぜんさまに、つい——あ、の、そして……御前様は、何時いつ御旅行

さきから。

紳士 俺の旅行か。ふゝん。
みずか あざ（自ら嘲ける口吻）
くちぶり きさま汝たちは、俺

が旅行をしたと思ふか。

初いつさくじつの鳥 はい、一昨日から、北海道の方へ。

紳士 俺の北海道は、すぐに俺の邸やしきの周囲ぢや。

初いつさくじつの鳥 はあ、（驚く。）

紳士 俺の旅行は、冥土めいどの旅の如きものぢや。昔から、事が、慥こう云ふ事が起つて、其が破滅に近づく時は、誰もするわ。平凡な手段ぢや。通例過ぎる遣方やりかたぢやが、為せんと云ふ事には行かなかつた。今云うた冥土の旅を、可厭いやぢやと思つても、誰もしないわけには行かぬやうなものぢや。又、汝等きさまらとても、慥こう

云ふ事件の最後の際には、其の家の主人か、良人か、可^{おと}えか、俺^{ある}がぢや、或手段として旅行するに極^{きま}つとる事を知つて居^おる。汝^{きさま}は知^りらいでも、怜^{りこう}惻^{あれ}な彼は知^おつて居^{きさま}る。汝^{きさま}とても、少しは分^わつて居^おらう。分^わつて居^おて、其の主人が旅行と云ふ隙^{すき}間^まを狙^{ねら}ふ。故^{わざ}と安心して大胆な不埒^{ふらち}を働^{はたら}く。うむ、耳^{みみ}を蔽^{おほ}うて鐸^{すず}を盗^{ぬす}むと云ふのぢや。いづれ音^{おと}の立^たち、声^{こゑ}の響^{ひび}くのは覚^し悟^ごぢやらう。何^{なん}も彼^かも隠^{かく}さずに言^いつて了^{しま}へ。何^{いつ}時の事^{こと}か。一^{いっ}体^{たい}、何^{いつ}時^じ頃^{ころ}の事^{こと}か。これ。

侍女 何^{いつ}時^じ頃^{ころ}とおつしやつて、あの、影法師の事^{こと}でございませうか。其^{ただいま}は唯^{いま}今^{いま}……

紳士 黙^なれ。影法師か何^{なに}か知^しらんが、汝^{きさま}等^ら三^{さん}人の黒^{くろ}い心^{こゝろ}が、形^{かたち}

にあらはれて、俺の邸やしきの内外を横行しはじめた時だ。

侍女 御免遊ばして、御前様ごぜんさま、私わたくしは何にも存じません。

紳士 用意は出来とる。女郎めろう、俺の衣兜かぶしには短銃ピストルがあるぞ。

侍女 えゝ。

紳士 さあ、言へ。

侍女 御前様、お許し下さいまし。春の、暮方くれがたの事でございま

す。美しい虹にじが立ちまして、盛りの藤ふじの花と、つゝじと一いっしよ所

に、お庭の池に影の映りましたのが、薄うすむらさき紫かしらの頭で、胸に炎

の煽かみました、真紅しんくなつゝじの羽はねの交まじつた、其の虹の尾を曳ひき

ました大きな鳥が、お二階を覗のぞいて居おりますやうに見えたので

ございます。其の日は、御前様のお留守、奥様が欄干らんかん越ごしに、

其の景色をお視ながめなさいまして、——あゝ、綺麗きれな、此の白い
 雲と、蒼空あおぞらの中に漲みなぎつた大鳥おおとりを御覧——お傍おに居りました
 私わたくしに然そうおつしやいまして——此の鳥は、頭かしらは私わたくしの簪かんざしに、尾を
 私わたしの帯に成るために来たんだよ。角つのの九つある、竜りゅうが、頭かしらを兜かぶと
 に、尾を草摺くさずりに敷いて、敵に向ふ大將軍を飾つたやうに。：
 ：けれども、虹には目がないから、私わたしの姿が見つからないので、
 頭かしらを水に浸して、うなだれ悄しおれて居る。どれ、目を遣やらう——
 と仰おつしや有あいますと、右の中指に嵌はめておいで遊ばした、指環の
 紅い玉あかたまでございます。開ひらいては虹に見えぬし、伏せては奥様の
 目に見えません。ですから、其の指環をお抜きなさいまして。
 紳士　うむ、指環を抜いてだな。うむ、指環を抜いて。

侍女　そして、雪のやうなお手の指を環わに遊ばして、高い処ところで、

青葉の上で、虹の膚はだへ嵌めるやうになさいますと、其の指に空

の色が透すきとお通りまして、紅い玉は、颯さつと夕日に映つて、まつた

く虹の瞳ひとみに成つて、そして晃きらきら々と輝きました。其の時でござ

います。お庭も池も、真暗まつくらに成つたと思ひます。虹も消えま

した。黒いものが、ばつと来て、目潰めつぶしを打ちますやうに、翼

を抔もげたと思ひますと、其の指環を、奥様の手から攫さらひまして、

鳥が飛びましたのでございます。露つゆに光る木この実みだ、と紅い玉

を、間違へたのでございませう。築山つきやまの松こすえの梢こずえを飛びまして、

遠くも参りませんで、堀の上に、此の、野の末すえの処ところへ入ります、

真赤な、まん円まるな、大きな太陽様おひさまの前に黒く留とまつたのが見え

たのでございます。^{わたしはだし}私は跣足で庭へ駈^{かけ}下りました。駈^かけつけて
声を出しますと、鳥は其のまゝ塀の外へ又飛びましたのでござ
います。^{ちようそこ}丁ど其処が、^{うらきどところ}裏木戸の処でございます。あの木戸は、
^{わたし}私が御奉公申しましてから、五年と申しますもの、お開^あけ遊ば
した事と云つては一度もなかつたのでございます。

紳士 うむ、あれは開^あけるべき木戸ではないのぢや。俺が覚えて
からも、止^やむを得ん凶事で二度だけは開^あけなければ成らんぢや
つた。が、其とても凶事を追^{おい}出いたばかりぢや。外から入つて
来^ふた不^ふ祥はなかつた。——其が其の時、^{きさつま}汝の手で開^あいたのか。
侍女 えゝ、錠の鍵は、がつちりさゝつて居^おりましたけれど、赤^あ
^{かさび}錆に錆切^{さびき}りまして、^お圧しますと開^あきました。くされて落ちた

のでございます。塀の外に、散歩らしいのが一人立つて居たのでございます。其の男が、鳥の嘴くちばしから落しました奥様の其の指環を、掌てのひらに載せまして、凝じつと見て居ましたのでございます。

紳士 餓鬼がつきめ、其奴そいつか。

侍女 えゝ。

紳士 相手あいては其奴そいつぢやな。

侍女 あの、私わたくしがわけを言つて、其の指環を返しますやうに申しますと、串じやうだん戯わたくしらしく、否いな、此は、人間の手を放れたもの、

鳥の嘴くちばしから受取つたのだから返されない。尤もつとも、鳥にならば、
何なんどき時なりとも返して上げよう——と然そう申して笑ふんでござ

います。それでも、何どうしても返しません。そして——確たしかに預あずか

る、決して迂散^{うさん}なものでない——と云つて、丁^{ちゃん}と、衣兜^{かぶし}から名刺を出してくれました。奥様は、面白いね——とおつしやいました。それから日を極^きめまして、同じ暮^{くれ}方^{がた}の頃、其の男を木戸の外まで呼びましたのでございます。其の間に、此の、あの、鳥の装束^{しょうぞく}をお誂^{あつら}へ遊ばしました。そして私^{わたくし}がそれを着て出まして、指環を受取りますつもりなのでございましたが、なぶつて遣^やらう、とおつしやつて、奥様が御自分に鳥の装束をおめし遊ばして、塀の外へ——でも、ひよつと、野原に遊んで居る小兒^{こども}などが怪しい姿を見て、騒いで悪いと云ふお心付^{こころづ}きから、四阿^{あずまや}へお呼び入れに成りました。

紳士 奴は、あの木戸から入つたな。あの、木戸から。

侍女 男が吃驚するのを御覧、と私にお囁きなさいました。奥様

が、烏は脚では受取らない、とおつしやつて、男が掌にのせま

した指環を、此処をお開きなさいまして、（咽喉のあく処を示

す）口でおくはへ遊ばしたのでございます。

紳士 口でな、最う其の時から。毒蛇め。上頤下頤へ拳を

引掛け、透通る齒と紅さいた唇を、めりめりと引裂く、売婦。

（足を挙げて、枯草を踏蹂る。）

画工 うゝむ、（二声ばかり、夢に魘されたるものの如し。）

紳士 （はじめて心付く）女郎、此方へ来い。（杖を以て一方

を指す。）

侍女 （震へながら）はい。

紳士 頭かしらを着けろ、被かぶれ。俺の前を鳥のやうに躍おどつて行け、――
 飛べ。邸やしきを横行する黒いものの形かたを確しかと見覚えて置かねばなら
 ん。躍れ。衣兜かくしには短銃ピストルがあるぞ。

侍女、鳥の如く其の黒き袖そでを動かす。をのゝき震ふと同じ状さま
 なり。紳士、あとに續いいて入る。

三羽の鳥 (声こゑを揃そろへて叫ぶ) おいらのせみぢやないぞ。

一の鳥 (笑ふ) はゝゝゝゝ、其處そこで何と言はう。

二の鳥 せう事ことはあるまい。矢張り、あとは、鳥の所為せいだと言は
 ねば成るまい。

三の鳥 すると、人間のした事を、俺たちが引被ひつかぶるのだな。

二の鳥 かぶらうとも、背負しょはうとも。かぶつた處ところで、背負しょつた

ところ

処で、人間のした事は、人間同士が勝手に^{なかま}夥間うちで帳面づらを合せて行く、勘定の遣り取りする。俺たちが構ふ事は少しもない。

三の鳥

なるほど

成程な、罪も報も人間同士が背負ひつこ、被りつこを

するわけだ。一体、此のたびの事の発源は、其処な、お一どの

が悪戯からはじまつた次第だが、さて、恚うなれば高い処で

見物で事が済む。嘴を引傾げて、ことんくと案じて見れば、

われらは、これ、余り性の善い夥間でないな。

一の鳥 いや、悪い事は少しもない。人間から言はせれば、善い

とも悪いとも言はうがまゝだ。俺は唯屋の棟で、例の夕飯を

稼いで居たのだ。処で艶麗な、奥方とか、それ、人間界で言

ふものが、虹にじの目だ、虹の目だ、と云ふものを（嘴くちばしを指す）此
 の黒い、鼻の先へひけらかした。此の節、肉どころか、血どこ
 ろか、贅ぜいたく沢な目玉などはつひに賞しょうがん翫ためしした験たましがない。鳳ほうお
 凰うの髓ずい、麒麟きりんの腮えらさへ、世にも稀まれな珍味と聞く。虹の目玉だ、
 やあ、八千年生延いきのびろ、と逆落さかおとしの廂ひさしはづれ、鶉ひよどり越ごえを遣
 つたがよ、生命いのちがけの仕事と思へ。鳶とびなら油揚あぶらげも攫さらはうが、
 人間の手に持ったまゝを引手ひったく繰る段は、お互に得手えてでない。首
 尾よく、かちりと銜くわへてな、スポンと中庭を抜けたは可よかつた
 が、虹の目玉と云ふ件くだんの代ものは何どうだ、齒も立たぬ。や、堅
 いの候そうろうの。先祖以来、田螺たにしを突つつくに鍊きたへた口も、さて、がつ
 くりと参つたわ。お底かげで舌したの根が弛ゆるんだ。癩しやくだがよ、振放ふりはなし

て素飛すつとばいたまでの事だ。な、其もとが源で、人間が何をせうと、彼かをせうと、薩張さつぱり俺が知つた事ではあるまい。

二の鳥 道理かな、説法せつぽうかな。お釈迦しやくさま様より間違ひのない事を云ふわ。いや、又お一いちどのの指環を銜くわへたのが悪ければ、晴はれあが

上つた雨も悪し、ほかくとした陽氣も悪し、虹にじも悪い、と

云はねば成らぬ。雨や陽氣がよくないからとて、何どうするもの

だ。得えての、空に美しい虹の立つ時は、地にも綺麗きれな花が咲く

よ。芍薬しやくやくか、牡丹ぼたんか、菊か、猿えが折つて蓑みのにさす、お花畑

のそれでなし不思議な花よ。名も知れぬ花よ。雑ざつと虹のやうな

花よ。人間の家やの中に、然そうした花の咲くのは壁にうどんげの

開ひらくとおなじだ。俺たちが見れば、薄暗い人間界に、眩まぶしい虹の

やうな、其の花のパツと咲いた処は鮮麗だ。な、家を忘れ、
 身を忘れ、生命を忘れて咲く怪しい花ほど、美しい眺望はない。
 分けて今度の花は、お一どのが蒔いた紅い玉から咲いたもの、
 吉野紙の霞で包んで、露をかためた硝子の器の中へ密と蔵
 つても置かうものを。人間の黒い手は、此を見るが最後掴み散
 らす。当人は、黄色い手袋、白い腕飾と思ふさうだ。お互
 に見れば真黒よ。人間が見て、俺たちを黒いと云ふと同一かい、
 別して今来た親仁などは、鉄棒同然、腕に、火の舌を掬めて吹
 いて、右の不思議な花を微塵にせうと苛つて居るわ。野暮めが
 な。はて、見て居れば綺麗なものを、仇花なりとも美しく咲
 かして置けば可い事よ。

三の鳥 なぞとな、お二ふためが、体ていの可い事を吐ぬす癖かに、朝あさ鳥がらすの、朝桜あさづゆ、朝露あさつゆの、朝風あさかぜで、朝飯あさめしを急いそぐ和郎わろだ。何だ、仇あだ花ななりとも、美しく咲さかして置いけば可い事だ。から／＼からと笑はせるな。お互こに此處こに何して居る。其の虹にじの散るのを待つて、やがて食くはう、突つかう、嘗なめう、しやぶらうと、毎夜、毎夜、此の間あいだ、……咽喉のどくちばし、嘴くちばしを、カチ／＼と嚙かみ鳴ならいて居るおのでないかい。

二の鳥 然さればこそ待つて居る。桜の枝を踏めばと云つて、虫の数ほど花はな片はなも露つゆもこぼさぬ俺たちだ。此のたびの不思議な其の大輪たいりんの虹うてなの台こうぎよく、紅玉しんぎよくの蕊しべに咲いた花にも、俺たちが、何と、手を着けるか。雛芥子ひなげしが散つて実みに成るまで、風が誘ふ

を視^{なが}めて居るのだ。色には、恋には、情^{なさけ}には、其の咲く花の二人を除^のけて、他^{ほか}の人間は大概風だ。中にも、ぬしと云ふものは、主人^{あるじ}と云ふものはな、淵^{ふち}に棲^すむぬし、峰^{あるじ}にすむ主人と同じで、此が暴風雨^{あらし}よ、旋風^{つむじかぜ}だ。一溜^{ひとたま}りもなく吹散^{ふきち}らす。あゝ、無慙^{むざん}な。

一の鳥 と云ふ嘴^{くちばし}を、こつ／＼鳴らいて、内々^{ないない}其の吹き散るのを待つのは誰だ。

二の鳥 は／＼は／＼、俺達だ、は／＼は／＼。先づ口^まだけは体^{てい}の可い事を言うて、其の実はお互に餌食^{えじき}を待つのだ。又、此の花は、紅玉の蕊^{しべ}から虹に咲いたものだが、散る時は、肉に成り、血に成り、五色^{ごしき}の腸^{はらわた}と成る。やがて見ろ、脂^{あぶら}の乗つた鮫鰯^{あんこう}のひも、

と云ふ珍味を、つるりだ。

三の鳥 何時いつの事だ、あゝ、聞いただけでも堪たまらぬわ。(ばた／＼と羽はねを煽あおつ。)

二の鳥 急ぐな、どつち道俺たちのものだ。餌食が其の柔かな白しろろじろ

々とした手足を解といて、木の根の塗膳ぬりぜん、錦手にしきでの木の葉こはの小皿盛こざらもりと成るまでは、精々せいぜい、咲いた花の首尾を守護して、

夢中に躍跳おどりはねるまで、楽たのしませて置かねば成らん。網あみで捕とつた

と、釣つつたのでは、鯛たいの味が違ふと言はぬか。あれ等らを苦くるませ

ては成らぬ、悲かなませては成らぬ、海の水を酒にして泳がせろ。

一の鳥 むゝ、其処そこで、椅子いすやら、卓子テエブルやら、天幕テントの上げさげ

まで手伝ふかい。

三の鳥 彼れほどのものを、（天幕を指す）持運びから、始末

まで、俺たちが、此の黒い翼で人間の目から蔽うて手伝ふとは

悟り得ず、薄の中に隠したつもりの、彼奴等の甘さが堪らん。

が、俺たちの為す処は、退いて見ると、如法これ下女下男の

所為だ。天が下に何と鳥ともあらうものが、大分権式を落す

わけだな。

二の鳥 獅子、虎、豹、地を走る獣。空を飛ぶ仲間では、鷺、鷹、

みさごぐらゐなものか、餌食を掴んで容色の可いのは。……

熊なんぞが、あの形で、椎の実を拝んだ形な。鶴とは申せど、

尻を振つて泥鰯を追懸ける容体などは、余り喝采とは参ら

ぬ図だ。誰も誰も、食ふためには、品も威も下げると思へ。然

までにして、手に入れる餌食だ。突くと成れば会釈はない。骨までしやぶるわ。餌食の無慙さ、いや、又其の骨の肉汁の旨さはよ。（身震ひする。）

一の鳥 （聞く半ばより、じろくど酔臥したる画工を見て居り）
おふた、お二どの。

二の鳥 あい。

三の鳥 あい、と吐す、魔ものめが、ふて／＼しい。

二の鳥 望みとあらば、可愛い、とも鳴くわ。

一の鳥 いや、串戯は掛け。俺は先刻から思ふ事だ、待設けの珍味も可いが、こゝに目の前に転がつた餌食は何うだ。

三の鳥 其の事よ、血の酒に酔ふ前に、腹へ底を入れて置く相談

には成るまいかな。何分なにぶんにも空腹だ。

二の鳥 御同然ごどうぜんに夜食前よ。俺も一先いっさきに心付こころづいては居るが、其の人間は未だ食頃まぐいごろには成らぬと思ふ。念のために、面つらを見ろ。

三羽の鳥、ばさくと寄り、頭こうべを、手を、足を、ふんくと鼻かぐ。

一の鳥 堪たまらぬ香においだ。

三の鳥 あゝ、旨うまさうな。

二の鳥 いや、まだ然そうは成るまいか。此の齒はをくひしばつた処ところを見い。総じて寝て居ても口を結んだ奴は、蓋ふたをした貝だと思へ。うかつに嘴はしを入れると最後、大事な舌を挟まれる。やがて

意地汚いじきたなの野良犬のらいぬが来て舐めよう。這奴しやつ四足よつあしめに瀬踏せぐみをさせて、可よいと成つて、其あとの後で取菟とりかからう。食くいものが、悪いかして。脂あぶらのない人間だ。

一の鳥 此の際、乾ひものでも構はぬよ。

二の鳥 生命いのちがけで乾ひものを食つて、一分いちぶんが立つと思ふか、高た蔭かまきえ絵のお肴ととを待て。

三の鳥 や、待つと云へば、例の通り、ほんのりと薰かおつて来た。

一の鳥 おゝ、人臭ひとくさいぞ。そりや、女のにほひだ。

二の鳥 はて、下司げすな奴、同じ事を不思議な花が薰ると言へ。

三の鳥 おゝ、蘭奢待らんじやたい、蘭奢待。

一の鳥 鈴ヶ森でも、此の薰かおりは、百年目に二三度だつたな。

二の鳥 化鳥ばけどりが、古い事を云ふ。

三の鳥 なぞと少わかい気で居おると見える、はゝはゝ。

一の鳥 いや、慫こうして暗くらやみで笑つた処ところは、我ながら不気味だな。

三の鳥 人が聞いたら何と言はう。

二の鳥 烏からすなき鳴だ、と吐ぬかす奴よ。

一の鳥 何にも知らずか。

三の鳥 不便ふびんな奴等やつら。

二の鳥 (手を取合とりあうて) おゝ、見える、見える。それ侍女こしもとの

気で迎へて遣やれ。(みづから天幕テントの中より、燭ともしたる蠟燭ろうそくを

取出とりいだし、野中のなかに黒く立ちて、高く手に翳かざす。一の鳥、三の鳥

は、二の鳥の裾すそに踞しゃがむ。）

薄すすきの彼方あなた、舞台深く、天幕テントの奥斜なめに、男女なんによの姿立たちあらわ 顕

る。一は少紳士いっわかきんし、一は貴夫人いっ、容姿美ようししく輝くばかり。

二の鳥 恋も風、無情も風、情なさけも露つゆ、生命いのちも露、別るすすきも薄、招

くも薄、泣くも虫、歌ふも虫、跡は野原だ、勝手に成れ。（怪

しき声こゑにて呪じゆす。一と三の鳥、同時ひざまずに跪ひざまずいて天を拝す。風一陣、

灯消ともしびゆ。舞台一時暗黒。）

はじめ、月なし、此の時薄月うすづき出づ。舞台明あかるく成りて、貴夫

人も少紳士わかきんしも、三羽の鳥も皆見えテントず。天幕あるのみ。

画工、猛然さとして覚さむ。

魔おそはれたる如く四辺あたりをみまはし、慌あわただしく画の包えつつみをひらく、衣兜かくし

のマツチを探り、枯草かれくさに火を点ず。

野火やか、炎々えんえん。絹地きぬじに三羽の鳥あらはる。

凝視。

彼処かしこに敵あるが如く、腕を挙げて睥睨へいげいす。

画工え 俺の画を見ろ。——待て、しかし、絵か、其とも実際の奴や等つらか。

——幕——

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成」 泉鏡花」国書刊行会

1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行

1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行

底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店

1940（昭和15）年発行

初出：「新小説」

1913（大正2）年7月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2009年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紅玉

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>